

(日本の) 土壌物理学は、「未完成」であるがゆえに…

成 岡 市*

いよいよ土壌物理学会の巻頭言を書かざるを得ない時がやってきた。しかし、いざ原稿に向かうという時まで、長い時間を悶々と費やしていたように思う。言いつねになるが、知命（論語；ちめい。天が自分に授けた使命を自覚する年齢）を過ぎる頃になると、文を連ねる以前に、先輩知人の顔や言葉が浮かび、遠慮が走り、自らの苦い経験談が深い記憶からよみがえり、それらが雑念として湧き出てきて、どうにも筆が進まない状態になる。こうしたことは、この年齢になって初めて気がつくことなのだろうか。

先日、ある観光地の土産物屋の前を通り過ぎようとした際、洒落た紳士と小学校入学前の利発そうな孫らしき子供の会話が耳に入ってきた。土産を隣近所にくいつ買っていくかという微笑ましい話題で、一箱に何個入っているのか合計何箱を買えば足りるのかといった算数に対して、孫の暗算結果は少々不足分の数を示したようだった。お爺さんは「〇〇ちゃんがそう言うのなら、もしかするとそうなのかもしれないね」と応えていた。そうこうするうちに、小生の歩みは二人の会話が聞き取れぬほどの距離まで進んでいたが、しばらくの間、この紳士の子供へ向けた言葉が耳から離れなかった。「もしかするとそうなのかもしれない…」という言葉が。

この土壌物理学会に多大な功績を残された岩田進午さん（第12代会長、1982年－1984年就任）から、ある用語事典の一節を分担者の一人として書くように依頼された時のことである。「閲読は大変厳しくさせてもらうけど、決して気を落とすことのないようにね」と付け加えられた。その言葉とおり、精魂込めて書いたつもりの元の原稿は影も形もなく真っ赤（赤ペンで修正指示された）に染まっていたことが記憶に深い。土壌物理学会には厳しい閲読をされる方々が何人も揃っているが、岩田さんはその中でも屈指の厳しさがあった。しかし、厳しい閲読を受けたことを嬉しく思い、感謝の気持ちが沸き起こってくるのである。岩田さんはどのような思いで閲読をしてくれたのだろうか。それを聞いてみたくなってきた今日この頃である。

新編土壌物理用語事典（土壌物理学会編、養賢堂、2002年9月初版発行）が出版された際、幸運にもその編集に携わることができた。旧編初版から28年後に新編の発行にこぎ着けている。それだけの時間の隔たりには理由があった。それは、新編発行の案（1998年）が承認されてから約3年間悶々とした時間を経過した後に、ようやく78名の執筆・閲読担当者が決まり、15項目（183頁）の用語群の執筆と編集に取りかかることになったということから推察できるのではないだろうか。つまり、「日本の土壌物理学の位置づけと将来進む方向は何か、あくまでも未完成、基礎学と応用学の狭間とは何か、伝統を活かすか新参を入れるか、ナンバーワンよりもオンリーワンを目指したい、助けられたり助けたりがある、…。」小さな事典の中で多くの論議が繰り返されていたのである。

* 三重大学大学院生物資源学研究所 〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

e-mail : narioka@bio.mie-u.ac.jp

土壌物理学分野でも、さまざまな視点をもった科学の目を持つことが認められる。

近年では、物理的視点を越えて、土壌微生物、土壌動物、植物根などの「生命」を対象としながら土壌物理的現象を解明しようとする研究者が活躍している。この新しい研究の途上、土壌物理特性の空間変動といった統計学的な解釈ができない、あるいは解釈が困難な事態に陥る場合があることも少なくない。「もしかするとそうなのかもしれない…」として、これまでの既存概念を疑うか、全く知識の外にある対象に立ち向かわなければならない場合があることも認めたい。

先人に尋ねることは、恥ずかしくてもするべきである。ある大先輩が「研究するという事は、深く物事を調べ考えて、理を極め明確にすることをいう。理を極めるということは、論理を立てることであり、原理、原則から出発して事実を論ずることにある。系統的に組立てられた知識すなわち学問のためには、物事について明確な理解と認識またはその内容を把握しなければならない」とゼミの場で繰り返し説いてくれた。そして、「機器を信頼しすぎるな。無人測定に任せて実態観察の努力を怠るな。サンプル採取や調整にあたっては絶対に緻密かつ周到であれ。結果の整理方法は、研究目的にかなう方式を取れ。詳しくれば詳しいほど良いとは限らない。安易に測定結果を平均値で表現するな」とも教えてくれた。

「研究の着想や発想」の楽しみはいつまでも持ち続けたい。くだんの大先輩は、「現在のものの考え方を否定する。不合理な点、不明な点を追求する。理想的な構想を推理する。既知の多くの知識、事象、現象を改めて組合せ直し、新構想を創造する」ことを大切にしていた。

土壌物理学の得意とする技に「測定」がある。測定数値をグラフ上で綺麗な形や線で表現できる場合と、ばらついたり、乱れたり、途切れたりする場合がある。綺麗な結果には科学の蘊奥（ウンオウ）があると主張する向きもあろうが、綺麗でない方に目がいてもよいではないか。そこに新しい何かがあると思えばこそ、である。

多くの先輩研究者が土壌物理学にチャレンジし、後続の若手研究者に声を掛け続けている。遠方の会場で開催されているゼミに参加してきた若手には「こうしたゼミに参加するだけでも研究者としての努力をしているといえるよ」といい、あるいは「研究の戦士を目指そう」といい、時には「威張るな」といさめ、酒を酌み交わしてきた。

（日本の）土壌物理学は、「未完成」であるがゆえに、もしかすると楽しみな未来があるのかもしれない。